

近いの。あ、波の音が聞こえる。」

暫時してポールは又語つた。河の上を自分の乗つてゆく小舟が軽く揺れて、眠氣が生じて來たとか、河岸が青々して、其處に咲いてゐる花の色が美しく、葦が背が高いとか、あれ、小舟が海に出て平らに滑るやうに走つてゆく、向ひの方に岸が見えて來た、其處に立つて居るのは誰だろう。など、ポールは、祈禱をする時にいつも爲るやうに、

應 接 十 分 間

客「みどりさん先日お約束の繁さんのお話して下

さいな」

み「あさうで御座いましたね、ちや申上ませうか。

とある日私は子供を歸してから例の如くせつせと掃除をして居りますと繁さんのお祖父さんが見えて。

「先生坊やもう歸りましたか。

手を合せた。その爲に態々腕を動かさないで、姉の首の後部で手の先を合せたので。

ボ「母様は、姉さんに似て居ますよ。顔で直ぐと母様だといふ事はわかる。此家の階下にある版畫は神々しさが足りません。御頭部の邊の後光が僕にまともに放射してゐる。」

黄金色の光の波は壁の上に再び來たが、室内に動くものはもう何も無かつた。(完)

み ど り

「おや、お逢ひになりませんでしたか今しがた小学校の重ちゃんと一緒に歸りましたが。

「あ、さようで、ちや、道が違ひましたんで御座いませう唯々々。

後は聞かずに返事許りして歸て行かれる。

其後影見送て私は思はず吹き出しました。

何故ならあの脊の高い、顔の長い、鼻の頭の赤

い六十のお老爺さんが唯六つの繁さん相手に押入に隠れたり泣く真似を爲るのかと思たからです。

それはかうでございます。

或日繁さんが申すには、先生僕ね昨日幼稚園から歸つたらねお祖母さんが繁ちやんお祖父さん居ないよつて云つたから嘘！居るくつて搜して段々搜したらお二階のお戸棚にかくねて居たからめつかつたつていつたらお祖父さん笑つて這ひ出して來ました云々。

又或時、先生僕は昨日お祖母さんと甲武に乗つて青山へ飛行器見に行つたんですそして歸つたらお祖父さんおいてきぼりされて淋しいくつて泣いて居ました云々。

まあこれだけでも大體家庭の様子がわかりませうが一體繁さんの御両親は滿洲に行つて居られるので繁さんはお祖父様お祖母様の御手許に残されてそれこそ老夫婦から掌上の玉と慈しまれ餘生を照らす光明と頼まれて楽しい朝夕を過して居られ

るのです。

實に老夫婦が限り無き愛は繁さんの五體に充ち満ちて或は快活なる動作となり笑となり言葉となつて絶えず荒廢空虚なる私を惠んで呉れます。

先日一日此幼兒が休みました時、日はうらくと照り乍ら紅葉は赤々と映え乍ら何だか曇つたやうで私は私の心に穴でも開いたのぢや無いかと思ひました。

いゝえ誤解して下すつては困りますよ、其愛らしいと云ふのは單に輪廓の正しい顔立に素直に鼻筋とが通つて可愛い、口と秀でた眉と人一倍長い睫毛涼しい二重瞼の眼とを持ち笑ふ度毎にゑくぼを見せる許りぢやありません。

其聯想其情緒が實に何とも云へぬ美しさを持つて居るからで御座います。

まあお聞き遊ばせ

さう何でも五月の下旬頃でした或方から櫻坊の可愛いのを頂きましたからお歸りの時皆に二つ

三つづゝ分けて遣りましてから。

皆さんがわけて頂いてようございしましたね、それ
お家へ持つて入らしてどうなさいますかと尋ね
ましたら、繁さんがね、大事にお湯へ連れて行て
ようく温めてやります若し道へおつこつて待つて
下さいよと泣いき待つて居て一緒に歸ります。

六月上旬青嵐烈しき日の事でした「今日は外へ
行くと大變ですな風が吹いてと申ます」と誰かが
エ、吹つ飛ばされます飛行器のやうにと申ます。

すると繁さんが、
僕と亘かちちゃんと帽子のブローペラを冠て片々の手で
仲好しても片々の手で翼はねをこしらへて腰へ草履袋
の車をつけて水道橋迄子供の飛行器が来たよ〜
て皆を驚かして往て復ります。

六月廿二日或方から幼児一同に枇杷の苗を下す
つたので其お禮の手紙をかかうと申ますと他兒は
大方「枇杷を下すつて難有御座いました」と申し
た中に繁さんは申ました。枇杷の實が生つたら送

て上げます。

十月卅日雨が降つて風が吹く日、晝飯の時熱と
窓外を眺めて居ましたがやがて先生(もみち)(楓)
の葉が葉のお母さんで彼方あつちの小さい葉(まゆみ)が
葉の子供で梧桐が葉のお父さんで今日は僕達が出
ないものだからどうしたんだらう子供が一人も外
へ出ない淋しい〜つてお話して居ます。あ、お
いで〜して居ます。

それからまだありますよ十一月二日の事でした
前日に移植した廿日大根を裏の畑に見舞てから菊
花壇の中を歩いて居ますと。

先生僕今日来る道でね丁度赤と黄と白との花が
有つたから、お庭の垣根の菊の花と唱てやつたん
です。

さうしたらね花が喜んで赤いのは赤い顔して笑
つてるし、黄色いのは黄色い顔して笑つてるし、
白いのは白い顔して笑つて居るから僕も笑てしま
つたんです。

十一月四日に柿の觀察をしましてね、いよ／＼皮を剥かうとして「どうぞ長く續くようにつて願て頂戴」と申ますと先生若し切れたら柿が悪いですねと何處迄も同情して呉れます。

又十一月五日葡萄を頂きましたので蔓を用意して參りました其の延び行く様等語り聞かせましたら、

先生僕家にもさう云ふのが有りますそして柘榴の處迄遊びに行て二人で仲好く遊んで居ます。

もうやめませうかではもう一、二、申ませう。

十一月某日晝飯の時少し落付かぬ子供が有りましたので静にして午砲の鳴るのを聞きませうねと云ひますと又繁さんが

騒いで居ると此處はいやだつて午砲が他處へ逃げて行つて聞えませんか。

え、さうですよ皆逃げられないように致しませうねつて、よい言草を教へられお蔭で静に頂きませうことが出来ました、それから遂此十一月の廿七

日でした五六人の子供が箱庭の周圍に集つて玩具の動物を一處へ集めて居りますので用があつて保育室へ行く脚を留めて、

何をして居ますかと問ひますと動物が喧嘩して居るんですと答へます「まあ喧嘩は御免です」と軽く申して保育室へ急ぎました暫くして戻りますと繁さんが、

今度は異ひましたと呼び掛けます。

さうですか今度は何ですか。

あのね犬と牛と御免なさいして馬と羊と又御免よつて今度は用意ドンで駈けつこして居ます……こんな調子で其處をとりなして呉れますので私はお蔭と楽しい日が多く又他兒も共によるこんで聞きますので不知不識の間に美しい話も少しは出来るやうになりました。本當に繁さんは私のよろこび私の慰めで御座います。

もう此でお約束は御返し致します今度はどうぞあなたからよいお話を御聞かせ下さいませ。